

水俣学通信

第 37 号
2014.8.1

Newsletter from the Open Research Center for Minamata Studies



恵比寿様シリーズ17 御所浦町のえびす様 (写真: 水俣学研究センター)

目 次

論説： 「水俣の記憶を語り継ぐ：水俣学アー カライブ構築」…………… 2 井上ゆかり	「福祉環境学科1年生の福祉環境学入 門で水俣研修を実施」…………… 6 中地重晴
報告： 「社会政策学会におけるチソン労働運 動史研究会の研究発表」…………… 3 富田義典	こぼれ話： 「水俣の漁業の始まり」…………… 6
「野村興産(株)イトム力鉱業所見学記」 …………… 4 山下善寛	客員研究員紹介： 「水俣病を発信し続ける」…………… 7 坂本しのぶ
「みなまた地域研究会の環境調査」… 5 花田昌宣	現地研究センター便り…………… 7 宮北隆志
	今後の活動予定、水俣学研究センター 日録…………… 8

《論説》

水俣の記憶を語り継ぐ：水俣学アーカイブ構築

水俣学研究センター研究助手 井上 ゆかり



水俣学アーカイブについて

本学では、故原田正純先生の提唱により、2005年4月に水俣学研究センターを設立し、水俣病事件の全体像解明を基礎に、新たな学術分野と方法論を開拓している。なかでも水俣病事件の教訓を国内のみならず国際的にも発信することが求められており、「水俣学研究センター所蔵資料データベース」作成事業はその柱となるものである。

これまでの水俣学研究センター所蔵資料データベースの成果として、2009年度より新日本窒素労働組合旧蔵資料の資料目録、物品目録、写真目録を順次ホームページ上で公開してきた。2013年度には、最首悟旧蔵資料や宮澤信雄旧蔵資料の資料目録、水俣病研究会蒐集資料には倫理的配慮が必要な部分をマスキングしPDFで閲覧できるようにして公開してきた。

水俣学アーカイブを構築する背景には次の理由がある。ひとつには、水俣病発生の公式確認から58年が経過し、第1次訴訟を経験した初期の水俣病患者も80歳代と高齢化し、歴史の証人が存在しない危機的状況が到来する局面を迎えること。2つ目には、これまでのテレビが繰り返し伝えてきた急性劇症型水俣病の映像が多くの人びとに水俣病であるという記憶を植え付けているがために、慢性水俣病患者の実相との間に距離が生まれていること。3つ目には、水俣市内及び周辺地域には、水俣病の歴史を記す案内看板は百間排水口と親水護岸にしかなく、水俣湾は埋め立てられ、地元においてさえ水俣病事件の記憶を辿ることが難しくなっていること。さらに水俣病の教訓を活かすには、水俣病が発生する以前から現在にかけての土地の歴史を知ってもらう必要があると考える。

先行する試みとしては、デジタル地球儀 (Google Earth) 上に被爆者の証言をマッピングした多元的デジタル・アーカイブをweb上に公開したヒロシマ・アーカイブやナガサキ・アーカイブがあり、さらに東日本大震災アーカイブのように地図上にさまざまな証言や記録をマッピングするとともに関連資料や記録も蒐集しアーカイブとして巨大なデータが集積され公開されているものがある。

水俣病事件に関してはこのような取り組みがなされたことはなく初めての試みであり、こうした先行するアーカイブの経験に学び、すでに蒐集してきた資料類や映像データを活用し、加えて水俣地域で構築してきた水俣病患者を始め地元住民との信頼関係をベースに

映像データをいっそう充実させ、水俣病の経験を国内外に広く伝えるとともに次世代にその実相をつないでいくためのオリジナルなアーカイブを構築するものである。なお、この計画の実施にあたっては、研究スタッフを中心に行うが、資料収集や解題について大学院生ならびに現地関係者を準研究員としておき、現地密着型のプロジェクトとする。

その内容

今年度、構築を目指す水俣学アーカイブは、本研究センターが9年にわたり撮りためてきた映像資料、すでに公開が進んでいる水俣学研究センター所蔵資料データベースと重疊的に閲覧するシステムとする。概要は次の通りである。

- (1) 証言：不知火海沿岸患者、新日本窒素労働組合員、研究者、支援者
- (2) 歴史：水俣市街写真資料で過去から現在の市街地の歴史を辿る、水俣病事件史年表
- (3) 自然：水俣の干潟に生息する生き物を紹介
- (4) 教育：セミナーや授業の紹介、水俣芦北公害研究サークルの教材資料紹介と教員の証言
- (5) 記録：新日窒労組8ミリグループ映像
- (6) 未来：水俣病事件の教訓を活かした地域づくりプロジェクトの紹介

証言映像は、証言者に許可を得たうえでプライバシーに抵触しない範囲でショートバージョンとロングバージョンを牧口敏孝 (客員研究員) が編集し公開する。また、各画像の転載ができないよう工夫を施す。さらに、国際的発信のため、同じ内容の英語版を作成予定である。今後は、カナダ水俣病など海外の情報も発信できるシステムを構築することが課題である。

おわりに

公式確認から58年が経過してもなお、水俣病とは何かが論じられ、水俣病認定患者にさえも「被害者のふりをして」という差別事件があとをたたない。視覚的に水俣の実相を国際的に発信することで、なぜ水俣病事件史は終わることができないのかを多くの人びとに考えていただく一助にしたい。水俣学アーカイブはその模索のはじまりである。

これまで、センターが撮りためてきた証言映像は、原田正純先生が築いてこられた患者さんや支援者らとの軌跡である。患者さんと先生の軌跡を語り継ぐ水俣学アーカイブを先生に贈る。

《報告》

社会政策学会における チッソ労働運動史研究会の研究発表

佐賀大学経済学部 富田 義典
(水俣学研究センター客員研究員)



水俣学研究センターを拠点に進められているチッソ労働運動史研究会の研究発表が社会政策学会第128回大会(2014年5月31日～6月1日中央大学)にて行われた。同研究会は、九州一円、大阪・東京の研究者から成り、2006年10月に発足して以降今日まで活動をつづけている。当初は、新日窒労組の元組合員の方々からの聞き取り調査を中心としていたが、ここ数年は論点を絞った聞き取りや資料研究を進めている。今回の研究発表は研究の中間的総括と同様の研究者との研究交流を目的として行われた。

社会政策学会とは、社会科学系では長い歴史をもつ著名な学会であり、労働史分野の研究発表・交流の場としてはもっとも相応しいとして選択されたものである。発表は、同学会の部会の1つである「労働組合部会」のコマ(2時間)が2コマ割りふられ、題目「新日本窒素の労使関係・労働運動の諸相」、コーディネーター＝鈴木玲(法政大学)、司会＝兵頭淳史(専修大学)で実施された。報告者とタイトルは以下のとおりである(報告順)。

富田義典(佐賀大学)「戦後労使関係史における安賃闘争の位置」

花田昌宣(熊本学園大学)「新日本窒素における工職身分撤廃闘争と企業内賃金決定」

磯谷明德(九州大学)「戦後日本化学工業の変容、チッソと労働組合」

鈴木 玲(上記)「新日本窒素労組と水俣病患者団体・支援組織との連携の分析」

セッションは、4つの報告と質疑、それを受けてのパネル討論のかたちで進められた。花田による研究センターとセンター所蔵のチッソ関連資料の紹介もあわせて行われた。

4報告については、富田は、1962年安賃闘争の過程を振り返り、その收拾の枠組みがその後の化学産業の雇用調整と組合による雇用調整への対応の原型を形づくった面があることを示した。花田は、昭和20年代のチッソの労使関係を「身分制」の視点から整理し、チッソにおけるそうした管理の特性は労使関係というよりもむしろ水俣という地域社会の特性を反映した側面が濃いことを示した。磯谷は、上記2報告の時期から1970年頃までのチッソの技術戦略と製品戦略を検討し、一度確立した技術戦略から容易に抜け出しえな

かったことがチッソの経営の特質となったことを明らかにした。鈴木は、新日窒労組が水俣病患者団体や支援団体との連携を強める1960年代後半以降を対象とし、社会学的知見を援用しつつ企業別組合である新日窒労組が社会運動団体と連携しそれが持続した根拠を、強い一体的連帯にいたらない慎重な連携の形態が選択されたことにあることを明らかにした。

報告に関する質疑は、テクニカルな質問をのぞけば、チッソの労使関係における身分制の特性をいかにとらえるかが主たるものであった。そのほかの論点にあまり拡がらなかったのは少し残念であった。今回の発表の組み立てが、鈴木報告をのぞけば、労使関係史的観点および経営史的観点に立つ報告からなり、労働組合運動と反公害運動や水俣病問題をあつかうものでなかったことも影響したのかもしれない。ただし、研究会のこれまでの思惑の1つである、労使関係や経営史をとおして、ほかならぬチッソという会社の特性を浮かび上がらせたいという研究スタンスへの理解は得られたのではないかと考えている。

チッソ労働運動史研究会は、今回の研究発表を機に、残されているテーマである安賃闘争以降のチッソの労使関係史、住民運動と労働組合運動の連携と緊張、新日窒労組の公害問題への取り組みなどへと研究を拡げてゆかなければならない。研究会のメンバーは、あらためて研究充実への意思を確認すべきであろう。

なお、今回の社会政策学会における研究報告は、法政大学『大原社会問題研究所雑誌』第675号(2015年1月)に論文の形で掲載の予定である。そちらも参照いただきたい。



社会政策学会 第128回大会の様子

《報告》

野村興産(株)イトムカ鉱業所見学記

みなまた地域研究会
(水俣学研究センター客員研究員) 山下善寛



はじめに

原発再稼働反対運動の合間をぬって、5月29～31日の日程で北海道北見市留辺蘂町の野村興産(株)イトムカ鉱業所を見学する機会を得た。イトムカ鉱業所は、日本一の水銀鉱山といわれるイトムカ鉱山で水銀を生産していたが、1973(昭和48)年に水銀含有廃棄物を処理する事業へと転換し、現在、新たな水銀鉱山の開発が禁止される中、かつての水銀精錬の技術を活かし、乾電池や蛍光灯、水銀含有廃棄物を日本は勿論、世界中から集め水銀を回収して海外へ輸出している。しかし、「水俣条約」の採択に伴い、輸出禁止法制化が求められ、水銀条約発効後、水銀の輸出は禁止される。

今回の訪問の目的は、水俣の汚染サイト問題(水俣湾埋め立て地・八幡残渣プール他)を考えるヒントを得るための視察であり、事前学習も行った上で参加した。

「水銀に関する水俣条約外交会議(水俣条約)」後の日本、水俣の役割

2013年11月、水俣病のような水銀被害を世界中でなくそうと、「水銀に関する水俣条約外交会議(水俣条約)」が開催された。水俣の住民の中には、水俣条約と命名する事に賛否両論があった。我々は、水俣病が60年近くたっても、被害の実態解明すらできておらず、水俣病の補償問題が認定制度と相まって進んでいない、肝心のチツが工場内で使用した水銀量も工場外へ排出した水銀の量も不明であるなど多くの問題が未解決であることから、水俣から「水俣病の教訓」を伝えようと、水俣の水銀汚染サイトについて、問題点を水銀条約会議の会場で展示し提起した。

このような状況の中、今回、水俣学研究センターが、野村興産(株)イトムカ鉱業所、鴻之舞金山跡地、北見市役所の視察にお誘いいただき、みなまた地域研究会のメンバー3人の同行が実現した。

野村興産(株)イトムカ鉱業所見学

イトムカ鉱業所に着くと、先ず右側の壁に「限りある資源を捨てずに有効利用、ISO14001認証取得・地球にやさしい環境をめざして」と大書されているのが目についた。会議室で早坂所長より、乾電池、蛍光灯のリサイクル、水銀回収などの事業内容の概要説明を受けた。次に、辰砂、水銀、朱(古代朱)、朱印、水銀含有薬品、最終処分所の遮蔽幕、培焼炉の模型を示して説明があった。その後、工場内を視察。回収された水

銀を計量し運搬車に乗せる作業を見学。34.5キロのボンベにマスク姿の作業員が計量を行うのだが、全て手作業で、作業員が腰痛を起こさないかと思い、計量台を高くしてはどうかと作業員に提案をした。水銀貯蔵庫は、作業員のために冷房してあるとの説明だが、換気扇はどうなっているのか、コンクリート張りの床の上の貯蔵でいいのかなどの疑問が残った。

○蛍光灯、乾電池の処理工場

次に蛍光灯の破碎現場と選別作業、培焼炉(キルト)を見学した。口金、ガラス片・粉、ガスに選別し、ガラス片は水洗した上で、培焼炉に入れ、ガスを冷やして水銀を回収していたが、特に選別作業は女性1人がマスクをかけ、立ち作業で大変であった。また、職場の粉塵対策が十分でないようであった。

○乾電池の選別作業と培焼炉(五段)

各地から搬入された乾電池をアルカリ、ニッカド、リチウムなど種類別に女性4～5人が立ち作業で分別し、男性がベルトで運ばれた電池を大きな篩の上で監視する作業を見学した。騒音、選別が大変そうで、年をとった作業員では務まらないとのことであった。

○産廃の中間処理場と最終処分場

水銀が回収された乾電池、水洗されたガラス片を大きな培焼炉(キルト)で600～800度で焼いて残った水銀を回収する。暑い夏の監視作業等大変だろうと思ったが、冬場は作業員に人気があるらしい。最終処分場は屋外で、面積18,549㎡、容量103,159㎡の広さで水はなくブルが1台置いてあった。土を被せるのに使うのだろうか?工場案内後、再度事務所にもどり、意見交換を行った。最後に色々情報交換をする事を約し、イトムカ工場を後にした。

今回の見学は、この他、鴻之舞金山跡地の住友鉱山の坑水管理状況、旧上藻別駅通見学等合わせ多くの事を学ぶ事ができた。この学びを今後のみなまた地域研究会の中で活かしていけたらと思っている。



野村興産 蛍光灯の回収工程の様子

《報告》

みなまた地域研究会の環境調査

水俣学研究センター長 花田 昌 宣

市民の手による調査活動の始まり

みなまた地域研究会は、松尾基金から研究助成を受け、水俣学研究センターとタイアップして、水俣市民が中心となった市民研究団体である。活動を始めて2年経過した。水俣病が地域社会や環境に及ぼした影響がいかなるものであり、それを教訓化していかなる地域を構想していくのか、改めて明らかにするというのがその基本的な姿勢である。

水俣では、認定や賠償をめぐる水俣病患者の運動、産廃処分場建設と町ぐるみの反対運動、ダイオキシンを始めとする土壤汚染問題など様々なことが起き、市民の取り組みもなされており、この会の会員の多くも参加している。会の取り組みは、それらの活動をふまえ、なお分かっていないことを市民自身の手で調べ記録し、発信しようということである。

一昨年来、さまざまに議論を重ね、海辺の生き物調査、袋湾の海底湧水調査などに取り組みはじめた。鹿児島大学の佐藤正典教授の指導を受けて実施した海辺の生き物調査によって、袋湾沿岸の干潟を中心に絶滅危惧種を含め多様な生物が存在することが分かった。こうした生物は、チツソが排出した廃水によっていったん死滅したらしいものと考えられるが、それが他の海域から戻ってきたものか（不知火海最南端の黒の瀬戸から海流が入ってくる）、あるいは絶滅せずに細々と生き残っていたものか、その特定には今後の継続的調査が必要だ。ただ、水質や底質の汚染の現状とその歴史の変遷が明らかになればヒントは得られるものと考えた。そこで、従来の活動に加えて今年に入って新たに、海辺の底質土ならびに生活環境内の土壌を採取し、含有する重金属の分析を行った。



定点観測しているハボウキ貝

不知火海の過去の水質汚染に関しては、水俣病発生の初期段階で一定程度調べられている。しかし、生態系全体に及ぶ視点はなかったし、現在では国や熊本県は「1968年以降は水俣病を発症するに足る高濃度の汚染はなかった」と主張しているが、根拠が薄弱な上、問題が多い。地域研究会が問題にするのは、水質、底

質、土壌など、ひとの生活環境と自然生態系全体の観点から、(たとえ微量であっても)汚染が継続していれば大きな影響があるはずだということであり、そのことを住民自身の手で明らかにすることが大切ということだ。

加えて、水俣市には、水俣湾埋め立て地および八幡残さプールといういわゆる「汚染サイト」があることは知られているにしても、その実態がどうなっているのかは明らかになっていないのが現状である。

汚染サイトとしての水俣と不知火海沿岸と今後

試験的に採取した底質や土壌からは、比較的高い水銀値が検出されており、とくに1カ所、住宅街の近隣から極めて高濃度な地点が見つかっている。詳細なデータの公表は、社会的影響の大きさも考えられるので、系統的な調査の結果を俟つことになる。

八幡残さプールの危険性は、東日本大震災クラスの地震でなくとも、ひとたび事故があれば、大きなリスクを抱えていることは誰でも理解しているところである。本来、海も干潟も地域住民のコモンズ(自然共有資源)であり、地域住民の自治に基づく管理が必要であると考えている。とはいえ、一部で、埋め立て地の水銀は、安定的な硫化第二水銀になっており、よしんば埋め立て地が崩壊したとしても、水俣病が起きる危険性はないという考え方が語られている。しかし、昨春秋の国際水銀条約を巡る国際的議論の中ではとても通用しない議論であった。

水銀ゼロを目指す社会は、水俣病を経験した地元から着手していく必要があると考えている。しかし、このような汚染サイトの外側から高濃度の水銀が検出されたということは、看過できない事柄である。

みなまた地域研究会では、生活環境の汚染、自然生態系の変容、地域の人々の暮らし、この3点をトータルに、市民の視点から市民の手によって明らかにし、地域の将来構想を示し、またそこに至る問題や課題を示すことが重要と考へ、若い人たちも巻き込みながら活動を続けている。



生き物は採集して並べる

《報告》

福祉環境学科 1 年生の福祉環境学入門で水俣研修を実施

熊本学園大学社会福祉学部 中地 重晴
(水俣学研究センター事務局長)

6月14、15日の1泊2日の日程で、社会福祉学部福祉環境学科1年生の必修科目である福祉環境学入門の水俣研修を実施した。毎年、梅雨入り後の実施なので、雨が心配になるが、今年は珍しく、お天気に恵まれてスムーズな研修となった。

2台の大型バスに4ゼミ合同の研修旅行は、1年生の交流を図る上でもよい機会となっている。お決まりの水俣病資料館の見学では、ちょうど、三枝三七子さんの原田正純先生の絵本の原画展が行われており、2年前に亡くなられた原田先生の業績を知るうえで、よいタイミングであった。昨年秋の水銀条約での式典開催をきっかけに、展示内容も変化しており、引率の教員にも参考になる見学となった。

第2世代訴訟の原告団長である佐藤英樹さん、スエミさん夫婦から、茂道に住んでいて、家族と同じからず曲がりなどの症状があっても、特に変わったことはないと思っていたが、後で、他人と比べるとそれが水俣病の症状であることを知ったというような体験談を聞いた。また、認定されるまでの苦しみや国、県の冷たい対応への率直な気持ちを聞くことができ、現地に行かないと話してもらえないことを学生たちも気づいたようである。例年質問が出ないが、今年は男子学生からいくつも手が挙がり、積極的な姿勢をみて、彼らの成長が期待される。

夜は、恒例の袋地区の棒踊りの演武体験で汗を流した。温泉で体を癒すには適度の運動であり、水俣の歴史に思いをはせるという良いプログラムだと自負している。後日、水俣研修の報告会を実施したが、代表で報告した4グループから棒踊りの感想も出なかったのはもったいないと思った。

昨年の最高裁判決や今年3月の熊本地裁判決を契機に、水俣病の認定をめぐる議論が活発化している。学生たちに少しでも現場の雰囲気味わってもらい、大学での学習の糧になれば、幸いである。



湯出小学校中学校で棒踊り保存会の方々から棒踊りの指導を受ける

《こぼれ話》

水俣の漁業の始まり

水俣の漁師たちは天草から流れてきた人が多いとよくいわれる。ではいつ頃となるとこれがよくわからない。聞き取りの記録をいろいろあさってみてもなかなか分からない。

ずっと気になっていたのだが、明治時代中期の熊本県の統計資料のなかにヒントを見つけた。明治16年の水俣、濱村では漁戸数80戸、漁人数は207人とあり、丸島、船津を中心として漁業が営まれていたことが分かる。ところが、同じ年の袋村の漁戸数は8、漁人数は28人とあり、現在の湯堂、茂道、月の浦を合わせた漁村地域とみればとても少ない。また、漁船の種類をみれば、袋村と濱村を合わせた水俣浦で「地引網が30、釣舟31」とありその他の網舟はない。また一方、漁業が盛んであった御所浦村では、129戸、924人とある。御所浦では舟の総数は227、網舟が185あり、水俣の方では実に零細な漁業が営まれていたことが想像できる。

村単位による統計はこの頃が最後で、その後は葦北郡で集計されるようになるので、さらに資料調査が必要になるが、聞き書き記録等とつきあわせてみるとこの明治半ばごろから徐々に増え始めるといえるようだ。

ところで、その頃の漁師たちが何を獲っていたのかということは、明治18年の「採捕の水産名」という項にみることができる。葦北郡では「鯛(たい)、蛸(たこ)、海老(えび)、鱈(このしろ)、鮭(すばしり、ほらの幼魚)、魚+斉(えつ)、鱈(えい)、烏賊(いか)、鰻(うなぎ)、鯰(えき、?)、鰯(ほらがい)」とあり、明治21年には「鰯(ほら)、鮭(すばしり、ほらの幼魚)、鱈(ふか)、章魚(たこ)、魚斉(えつ)、鰈(かれい)、鯰(えき)、鱈(すずき)、海老(えび)鯛(たい)、海鼠(なまこ)、雑魚」と記載されている。これをどう考えるかは漁師さんたちに聞いてみないと分からない。ただ、芦北、水俣の漁業の中心となったイワシ漁は、この時期より後であるということはいえよう。(『明治前期熊本県農業統計』『熊本県統計書(各年版)』より) (花)

《客員研究員紹介》

水俣病を発信し続ける —坂本しのぶさん(水俣学研究センター客員研究員)

聞き書き—



1956(昭和31)年、水俣病公式確認の年に生まれ、今年7月で58歳になった。

姉の真由美さんは小児性の水俣病で、しのぶさんが1歳半の頃、4歳で亡くなっている。母フジエさんの話では、しのぶさんが歩けるようになったのは5歳の頃で、同じ年に生まれた子より1年遅く小学校に入学した。しのぶさん小学6年生の時、裁判提訴。中学校卒業式の翌日が勝訴判決。

同じ時期に生まれた仲間がだんだんと歩けなくなる中で、しのぶさんも足が弱くなりながらも器具を使って歩いている。「自分でできることは自分でせんば」という母フジエさんの言葉を守り、リハビリにも励んでいる。

まさに水俣病とともに生き、そして闘ってきた。現もしのぶさんの闘いは、いろいろな形で続いている。そのひとつに、水俣病を伝える活動がある。小中学校から呼ばれて子どもたちに自分の体験や思いを話すこ

ともある。また、学校の職員研修や人権教育関係者の水俣現地学習で話をすることも多い。体調に少し不安があるので遠くへは行けないが、熊本県内ならば出かけて行けるとのことである。

最近思うことは、今、安倍首相の思う通りに進んでいるような気がする。「何もしないまましていると、戦争がまた始まるのではないかと心配している」と語るしのぶさん。

「今の子どもたちが戦争に行かんばんかもしれん。自分たちは悪くないのに、人が死んだりする。水俣と同じではないか。」

「なかなかこちらの思うようにはならないけれども、黙っとればダメ。」

「いろんな人が、病気の人も、平和で安心して生きていける街になればいいなあ。」

現在の世の中の動きや政治について、熱く語るしのぶさんです。(聞き手:水俣学現地研究センター 田中 睦)

水俣学現地研究センター便り

水俣学現地研究センター長 宮北隆志

今年1月、現地研究センターに「キエーロ」が設置され活躍しています。お世話役は、主に職員の田中睦さん、菜園づくりと一緒にお願いしています。

2011年3月に、「ゼロ・ウェイストのまちづくり水俣宣言」を採択した水俣市では、ごみ処理を焼却や埋め立てに頼らないまちづくりを目指して、市民・事業者・行政の協働による様々な活動がゼロ・ウェイスト円卓会議を核として展開されてきました。

市内300か所に設置されている資源ごみステーション調査、家庭から排出される燃えるごみの組成調査などを市民の手で実施する中で浮かび上がった1つの課題が、可燃ごみに混入する「生ごみ」の問題でした。そこで、登場したのが生ごみの自家処理器「キエーロ」です。水俣市と同じ思いでゼロ・ウェイストに取り組んできた神奈川県葉山町の松本信夫さんが試行錯誤の末考案したもので、日曜大工でつくることができます。人口3万3千人の葉山町では、1,400台の「キエーロ」が普及し、可燃ごみの削減に大きな成果(44%減)を上げています。

水俣市では、キエーロ制作ワークショップが、1月18日、19日の両日、久木野愛林館と水俣駅前ふれあい館で、熊本県建築士会水俣・芦北支部の協力を得て開

催されたこともあり、現在約70世帯で「キエーロ」が試行的に使われています。今年3月の、水俣市エコフェスタでは、葉山町の松本さん夫妻による「キエーロ」使いこなしのための講習会も開催されました。

「キエーロ」には、直置き(底なし)タイプとベランダ型(底あり)タイプがありますが、現地センターに設置されたのは後者です(写真)。日当たりのよい場所に設置し、①深さ20cmほどの穴を掘って、貯めておいた生ごみを入れます。②穴の中で周りの土とザクザク混ぜ、適宜水を加え、③上から乾いた土をかぶせ、生ごみを覆います。そうすると虫が発生することもなく、夏場は10日間、冬は2~3週間ほどで分解されるという、優れものの生ごみ自家処理器です。

現地研究センターにお越しの際は、田中さん自慢の菜園の横に置かれた「キエーロ」もぜひご覧ください。文字通り、生ごみが消えてなくなる「キエーロ」、百聞は一見にしかず。



水俣学現地研究センターに設置したキエーロ(ベランダ型)

今後の活動予定

第13期水俣学講義開講

- 開催日：9月25日から 毎週木曜
- 時 間：13:00～14:30
- 場 所：熊本学園大学11号館1163教室（11号館6階）

第11期公開講座

「地域からまなぶ社会福祉の最前線」

- 開催日：9月30日～10月28日 毎週火曜
- 時 間：18:30～20:00
- 場 所：水俣市公民館第一研修室

詳細は、当センターのホームページをご覧ください。
<http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/>

水俣学研究センター日録

4月

- 1日 胎児性世代の被害に関するWG：花田・井上・田尻・牧口・谷・伊東・山下・平郡（水俣）
- 2～4日 胎児性世代訴訟関連集会：花田・井上・田尻・牧口（東京）
- 8日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 9日 タイ科研究研究会：宮北・花田・藤本・吉村・井上・田尻（大学）
- 12日 溝口訴訟最高裁判決1周年報告会：花田・田尻・田中（水俣）
- 16日 DB科研入札公示（大学）
- 17日 みなまた地域研究会：花田・中地・田中・永野・山下・大嶽（水俣）
- 20日 胎児性世代の被害に関するWG：花田・井上・田尻・平郡・山下・谷・伊東（大学）
- 21日 ZWRT／茶飲み場作業部会：藤本（水俣）
- 22日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 24日 石牟礼智さんより、図書寄贈（水俣）
- 25日 原田先生の本打合せ：花田（大学）
DB科研入札開示：花田（大学）
- 29日 みなまた地域研究会調査：花田・田中・永野・大嶽・坂本（水俣）
- 30日 「2つの最高裁判決から1年 水俣病事件を考える集い」：花田・井上・田尻・牧口（水俣）

5月

- 1日 水俣病慰霊祭：花田・井上・田尻・牧口（水俣）
- 3～7日 タイMTP調査：宮北・中地・吉村（タイ）
- 8日 みなまた地域研究会：花田・中地（水俣）
- 11日 胎児性世代の被害に関するWG：花田（大阪）
- 12日 茶のみ場作業部会：宮北・藤本（水俣）

- 13日 第22回公開セミナー「第5回水俣病を伝えるセミナー」打合せ：井上・田尻・田中・梅田・高木・濱口（水俣）
高岡医師と意見交換：花田・井上・田尻（水俣）
- 18日 福岡人権研究所記念講演会「水俣病事件の現在と水俣学の課題：差別と人権の視座から」：花田（福岡）
- 20日 みなまた地域研究会学習会：花田・中地（水俣）
- 26日 ゼロ・ウェイト円卓会議：宮北・藤本（水俣）
- 27日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 29日～31日 イトムカ視察：花田・宮北・中地・藤本・永野・山下・大嶽・谷（北海道）
- 30日 岡田靖雄先生、水俣案内：井上・石坂（水俣）

6月

- 1日 社会政策学会全国大会、新日窒労組の工職身分格差撤廃に関する研究報告：花田・磯谷・富田・鈴木（東京）
- 2日 水俣学ブックレット打合せ：花田・宮北・中地・田中（水俣）
- 3日 原発事故情報共有学習会：中地（東京）
- 6日 熊本県西原村より水俣研修受け入れ：田中（水俣）
- 9日 茶のみ場作業部会：宮北・藤本（水俣）
- 10日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣）
- 11日 2014年度水俣学研究センター総会：（大学）
原田先生三回忌・原田先生を偲ぶ会
「水俣学研究」編集委員会議：山中・萩原・井上・田尻（大学）
- 13日 環境社会学会：藤本（福岡）
- 14～15日 福祉環境学入門水俣研修：花田・宮北・中地・井上・田尻（水俣）
- 19日 水俣資料調査：花田（水俣）
- 21日 市民環境研究所講演：中地（京都）
- 23日 タイ科研究研究会：宮北・花田・中地・藤本・吉村・井上・田尻（大学）
- 24日 健康・医療・福祉相談：下地（水俣、出水）
- 27～28日 九大非常勤 社会人類学講義VI～公害問題水俣病と向きあう現場と将来へ：田尻、28～29日：井上、29～30日：藤本（福岡）
- 29日 胎児性世代の被害に関するWG：花田（大阪）
公害科研全体研究会：宮北（東京）
- 30日 紀伊国屋書店とDB会議：井上・花田・山本（大学）

編集後記

国による水俣病患者の審査会（臨水審）の結果が出された。患者を救済する気持ちは、本当にあるのだろうか。
 (M・T)

水俣学通信

第37号 2014.8.1

編集／熊本学園大学水俣学研究センター 発行人／花田 昌宣
 連絡先／〒862-8680 熊本市中央区大江2-5-1 熊本学園大学水俣学研究センター
 Tel：096-364-8913(タイアルイン) Fax：096-364-5320
<http://www3.kumagaku.ac.jp/minamata/> E-mail:minamata@kumagaku.ac.jp
 印刷／ホープ印刷株式会社